

学生が薦める育児本

—「家族援助論」の取り組みから—

川崎 愛

I. はじめに

保育士養成課程において「家族援助論」が設置されたのは2003年のことである。

2011年度からは、保育士の「保護者に対する保育に関する指導」（児童福祉法第18条の4）についてより実践的に学ぶために「保育相談支援」が新設される。「保育相談支援」では、「家族援助論（2011年度からは家庭支援論）」、「社会福祉援助技術（2011年度からは相談援助）」との関連性や「保育所保育指針」第6章の内容を踏まえて、保育現場で活用できる相談支援の内容と方法を学ぶ。

1989年の「1.57ショック」以降、国は次々に少子化対策を打ち出してきたが出生数の減少は止まらない。

それにやや遅れて保育士養成課程では「保育所保育指針」の改定と保育現場のニーズに合わせて十年に満たない間に、保護者支援に関する教科目や内容を増加させている。保育士は子どもの保育だけでなく、保護者支援のための知識や技術の修得が必須となった。

少子化の背景には子どもを生むこと、育てることをためらう個人的な理由、社会環境が存在する。

そこで、将来に向けて「子育て支援」や「子育て」の一助となるよう一人一冊育児に関する本を選んで、内容とお薦めの理由を各自A4一枚¹⁾にまとめ、受講者で共有することにした。本稿はその報告と分析で、講義の目標と学生の関心の所在の位置関係を探って今後の授業の展開に役立てたい。

II. 授業内容

1. 講義のねらい

保育士養成過程における教科目「家族援助論」の教授目標は次の通りで（ ）は2011

年度からのものである。

①保育所のもつ「子育て支援」を重要な社会的役割として理解し、児童・親を含めた家族が保育の対象であることを理解させる。(家族の意義とその機能について理解する)、②「子育て支援」は保育所だけでなく、その他の児童福祉施設の親についても同様に必要とされることを理解させる。(子育て家庭を取り巻く社会状況等について理解する)、③現在の家族を取り巻く社会環境における家庭生活、とくにその人間関係(夫婦・親子・きょうだい)のあり方を理解すること及びそれをふまえて適切な「相談・助言」を行うことは「子育て支援」のために欠かせないものであることを理解させる。(子育て家庭の支援体制について理解する)、④1～3を踏まえ、それぞれの家族のニーズに応じた多様な支援対策を提供するため、児童福祉の基礎となる家族の福祉を図るための種々の援助活動及び関係機関との連携について理解させる。(子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開と関係機関との連携について理解する)。

筆者は上記のことをふまえつつ、人口構造の変化と少子化、生殖医療に触れたのち、女性が母親になるという選択をする過程は様々であることや母親、父親それぞれの置かれた社会的状況を伝え、「親」への想像力を働かせられるような教材の提供を試みている。

2. 受講者の属性と本の入手方法

受講者は全て社会学科の2年生で龍ヶ崎2名、新松戸18名、合計20名(男女各10名)である。

そのうち龍ヶ崎2名、新松戸5名の計7名は保育士資格の取得を目指している。

龍ヶ崎の2名は保育士志望でふたりとも「楽しそう」「(簡単に)読めそう」「将来役に立ちそう」と地元で気に入った本を購入した。

新松戸の多くの学生は大学の図書館で本を借りている。地元の図書館や近所の人から借りたり、自分の持っている本を取り上げた学生は各1～2名と少数派だ。

借りる際の決め手は、タイトル(題名が深い、と感じた)や表紙、イラストのかわいさに魅かれてという場合と内容に興味があった(例えば虐待や自閉症、現在の育児問題、あえてお父さんに焦点をあてているなど)、読みやすそう、実践的で勉強になりそう、と程度の差はあるにしろ中身を吟味したと思われる場合とがある。

Ⅲ. どのような本を選んだか

1. 本の重複、人気の作者

世界乳幼児精神保健学会の会員で「赤ちゃんとその家族を中心においた社会のあり方をめざして活動している人たちがいる。そんな国があるということを、日本でもぜひ

知っていただきたい」と渡辺久子（世界乳幼児精神保健学会副会長）、トウーラ・タンミネン（同学会前会長）、高橋睦子らによる『子どもと家族にやさしい社会 フィンランド 未来へのいのちを育む』（2009年、明石書店）は2名が取り上げた。フィンランドが充実した子育ての支援システムを導入したのは、1970年代の初めに急激に出生率が下がったため、フィンランドと日本のこれからの社会のあり方が分かりやすく書かれている、とした学生と日本の子どもたちはいつまでも枯れない造花が美しいと教えられているのに対し、フィンランドでは人間は自然の一部という考えが浸透しているとして普通の人の普通の暮らしを紹介した学生がいる。

児童精神科医の佐々木正美の著書は4名が選択しているが、全て異なるものである。

『子どもへのまなざし』（1998年、福音館）は30年以上にわたる外来での相談で感じた子育てをめぐる問題について、母親や保育者らとの勉強会で乳幼児期の大切さを再確認するためにまとめたものである。

『かわいがり子育て－3歳までは思いきり甘えなさい』（2007年、大和書房）には、自分の気持ちを大切にされた子どもは人の気持ちも大切にできる子になり、甘やかして育てた方が早く自立するので「ありのまま、しっかり甘えさせる、子どもの要求に答える」と3つのメッセージが込められている。

『子育てでいちばん大切なこと』（2008年、大和書房）は、「どうして赤ちゃんはニコニコ笑っているのか」「どうしてそんなにかわいいのか」などの疑問や「しつけはいつからどうやってすればいいか」「上手にほめることができない」などの悩みへのポジティブな回答が載っている。

『『育てにくい子』と感じたときに読む本』（2008年、主婦の友社）は乱暴、すぐどなる、友だちに怖がられる子、忘れ物が多く片付けられない子、また上の子をかわいいと思えない母、大人げなく怒ってしまう父など親子双方の問題を挙げ、「思いやり」「信頼関係」「自律性」などのつくり方を考えていく内容である。

2. 作者の属性と本の分類

上記以外の本を便宜上五つに分類すると以下の通りとなる。

一つ目は保育者、長年ラジオの児童相談を行っている者、教育や心理領域のコンサルタントなど、保育現場や育児の悩みをよく知る者が子育て不安に対するアドバイスをしたものである。

二つ目は乳幼児の心身の発達や保育内容「人間関係」といった保育士科目の教科書、児童精神科医・弁護士・社会福祉学、心理学、自閉症児、脳科学の分野の研究者による文献があげられる。

三つ目は子どもが被害にあった事件や子どもが引き起こした事件をジャーナリストティックな視点でとりあげたもの。

四つ目は親のための子育て「マニュアル本」、五つ目はその他として絵本を選んだ学生のものを紹介する。

3. 本の紹介

読者への子育てに関するアドバイスとして書かれたものは、4冊ある。

グループこんべいと『心の保育を考える CASE67』（2003年、学研）は、保育現場での子どもの心の声を想像して、保育学と発達心理学の視点で対応方法をイラストつきで分かりやすく解説したもので、子どもも親も責めずに受け入れる、受けとめる援助が必要、としている。簡単な心理テストがついていて、自分のタイプが特定でき、タイプごとの留意点も掲載されている。

平井信義『『心の基地』はおかあさん』（2003年、新紀元社）は第一章「反抗期」、第二章「思いやり」、第三章「問題行動」、第四章「問題行動の原因」で構成され、親や教師が自分自身を反省することが、子どもの人格の向上につながる、としている。

松永暢史『男の子はもっと遊ばせろ!』（2009年、幻冬舎）は、男の子の遊びが理解できないお母さんへ向けて書かれたもので、遊びのモデルは「昭和の男の子」、社会の縮図である群れ遊びで得た力は勉強やさまざまな局面で発揮できると力説している。

佐藤英郎『キッズコーチング』（2006年、アチーブメント出版）は第一章「子どもが成長しやすい家庭をつくるために」、第二章「親が子どもに教えてあげられること、教えなくてはいけないこと」、第三章「親が手本を見せて、芯のある子に育てましょう」、第四章「子どもとの対話を大切にすれば、考える子に育ちます」、巻末には子ども用ワークシート「一週間やってみようシート」がついている。

教科書は小関康之『乳幼児の発達と子育て実践』（2004年、中央法規）と谷田貝公昭『保育内容シリーズ② 人間関係』（2005年、一藝社）の二冊で、前者は心身の発達をゆがめられた子どもへの子育て支援策について、後者は子どもが最初に出会う家族とのコミュニケーションから保育所、幼稚園での会話や遊びを通しての関係の広がり、子どものおかれた環境の変化などが述べられている。

研究者によって書かれた啓蒙的な著書は4冊ある。

小児科医・小児精神科医である小林美智子（日本子ども虐待防止学会会長）、貧困研究・児童福祉研究を専門とする松本伊智朗編『子ども虐待 介入と支援のはざまで―「ケアする社会」の構築に向けて』（2007年、明石書店）は2005年9月の日本子ども虐待防止学会JaSPCAN北海道大会シンポジウムを記したものである。「わが国より三〇年先を歩いてきたイギリスが体験し苦悩した事から見出した対応とその考察」をもとに子ども虐待防止活動の日英比較を行い、活動に関する議論を進めていく際の論点の明確化を試みている。

応用認知心理学が専門の仁平義明『ほんとうのお父さんになるための15章―父と子の

発達心理学―』(2003年、ブレーン出版)は、タイトルの通り父親に焦点をあてていて、子どもとの遊び、家庭での立場・役割、父親の妊娠、父親のさびしさ、しつけ、世界のお父さんなど15章で構成されている。著者は母親のために「父親は強くあるべきである」とのメッセージも送っている。

中根晃『自閉症児の保育・子育て入門』(1996年、金剛出版)は、親や保育者に向けて自閉症の理解、自閉症児の家庭での養育や保育の指導方法を記載している。

茂木健一郎・須藤珠水『脳を活かす子育て術 0歳からの宝探し』(2010年、PHP研究所)は脳科学の視点と実践的な側面から親子のコミュニケーションを考察している。親は「ほめるアスリート」になろうとかかかげていて、子どもの年齢に合わせた脳を育む48のヒントを紹介し、人の気持ちの分かる子どもに育てるためにはどうすればよいかを伝授している。

ジャーナリスティックな著書は上田芳樹による『親子になろう』(2000年、晃洋書房)で、毎日新聞に掲載された子どもの起こした事件の背後にある日常的な不満に親や社会はどのように向き合えばよいかを述べている。

「マニュアル本」は二冊あり、一冊は近所の小さい子どものいる家から借りたもの、もう一冊は保育士志望の学生が乳幼児の理解のために購入したものである。

高橋明宏『シンプルに育てる7つの方法』(2000年、サンマーク社)は育児に頑張りすぎる母親が、少し距離をおいて自分の子育てを振り返り、子どもに負担にならず、母親にもストレスがたまらないような育児の方法を提案している。

K・K・ファンタジー編『てるてる天使の育児百科 ハッピー★ベビーケア』(2009年、学研教育出版)は生後0ヵ月～24ヵ月の子どもの発達、養育者が知っておきたいこと、Q&Aで赤ちゃんの母親の身体と心の疑問を解決、父親への育児アドバイス、赤ちゃんの成長に合わせた離乳食のレシピ、病気や事故の原因や対処方法を多色刷り、イラスト入りで解説している。

系統が異なるものでは、子どもの頃、姉からもらった大好きな本(なかむらみつる『やさしいあくま』2000年、幻冬舎)を選んだ学生がいた。登場するのは、男の子と悪魔とおばあちゃん、男の子が山に薬草を採りに行ったとき、悪魔の子と友達になるという話で、優しさや大切なことが分かり、泣けると紹介している。

IV. お薦めの理由

1. 誰に読んでほしいか

まずは、これから子育てをする男性や女性、保育士や将来親になる人が「子どもっておもしろいな!」と原点に戻れるので読んでほしい。

そして、実際に子育てをしていて、娘・息子が三歳になる前の親、子どもとのコミュ

ニケーションがうまくとれない人、子育てに行き詰った母親、小学生以下の男の子を持つ母親に。

さらに父親の存在がいかに子育てに重要であるか認識してほしいので、女性が家事・育児の多くを担うべきだと考える「ステレオタイプ」の父親たちに、という具体的に読者を指名する意見がみられた。

他には日ごろの人間関係に不安がある人、自閉症の理解のためにできるだけ多くの人に読んでほしい、との記述があった。

2. なぜ読んでほしいか

育児は「育自」ともいわれる。

佐々木が「乳幼児期は人格の基礎をつくる」と指摘するように、育児は「子どもが幼いほど待たなし」で「三歳までに思いきり甘えさせることが大切」である。

なぜなら「(大学などと比べると)保育園・幼稚園の時期は二度と繰り返すことのできない大事な時間」なので、その準備として読むことを薦めている。

ほかには「子どもの豊かな心を育てるために子育てを考え直せる」「子どもはたくさん遊んだら自ら進んで勉強することを知ってほしい」「虐待の要因が分かる」との記載があった。

一方「育自」は「子どもへの接し方が詳しく書いてあるので、育児不安の軽減に」なり「私はありのままでいいのだ、というメッセージを受け取れる」、「今の自分にもたべになることが書いてある」ため、読むと「子育てしたくなる」。他に「本がきれいな人にも読みやすく育児のポイントが分かる」。

『やさしいあくま』は「誰でも人にやさしくできる」ことが分かり、「心を育てるという意味で読んでほしい」と思いを寄せている。

V. 関心の広がり

1. 発表を聞いて興味をもった本

課題は13回目の授業時に別紙の筆者による見本と作成用のプリントを渡し、14回目の授業の際に提出させた。15回目の授業の初めに龍ヶ崎、新松戸の受講者を合わせた20名分を一冊にまとめて各自に配布し、それぞれ自分の選んだ本についてプレゼンテーションをした。授業の最後にかいたリアクションペーパーによると、他の受講者のプリントと発表を聞いて関心をもった本は7冊ある。

一番人気があったのは『ほんとうのお父さんになるための15章』である。内容もおススメの理由も分かりやすくびっしり書かれ、余白には4人のお父さんの顔のイラスト入り、母親に注目した育児本が圧倒的に多いなか、父親に注目しつつ、「母親への応援

歌」になっている点を口頭でも熱心に伝えていたのに魅かれたようだ。

読んだら自分も「子育てをやってみたい気持ちになった」と書かれた『脳を活かす子育て術 0歳からの宝探し』と「この本を読んだら子育てが上手にできるような気がする」『キッズコーチング』に興味を持った学生も複数いる。

他に挙げたのは、『子ども虐待』、『育てにくい子』と感じたときに読む本』、『子どもと家族にやさしい社会 フィンランド 未来へのいのちを育む』、『てるてる天使の育児百科 ハッピー★ベビーケア』の4冊である。

2. 興味をもった理由

『ほんとうのお父さんになるための15章』は「父親に関する本があまりないので」と書いた学生が複数いた。「いずれ父親になるから父親に焦点をあてたものに関心がある」「父親になったとき、どうしたらよいか分からない」からとの回答で分かるように興味をもったのは全て男子学生であった。

『脳を活かす子育て術 0歳からの宝探し』は脳科学という領域がおもしろそうで、「科学的な視点」がいかにも子どもの発達に「効果がありそう」との期待から選ばれた。

『キッズコーチング』は自分がスポーツをしたり、サッカーのコーチをしているので、それに活かそう、との理由からである。

その他『子ども虐待』は深刻な社会問題だから、『育てにくい子』と感じたときに読む本』は同じ作者（佐々木正美）がどのようなことを書いているか知りたい、『子どもと家族にやさしい社会 フィンランド 未来へのいのちを育む』はフィンランド人の考え方への関心、『てるてる天使の育児百科 ハッピー★ベビーケア』は子育てに必要な子どもや親の心理が分かりやすく書かれているようなので、という理由から選ばれた。

VI. むすびにかえて

講義のねらいは、家族の機能や人間関係、社会状況、子育て支援体制、関連機関など概ね四項目への理解と親への想像力であった。

学生が選んだ本は、乳幼児期の子どもを知り、親をはじめとするおとなは、どのように子どもと関われば子どもの可能性を引き出せるのか、という家族の機能や人間関係に分類できるものが多い。

背景には、保育士や親になったときに役立てられるのでは、との考えがある。同時に自分の子どもの頃の親、保育者、周りの人々との関わりを思い出しながら、本の内容にうなずいたり、違和感や乳幼児の能力に驚きを味わったりしながら、子どもを育てている自分をイメージしたことだろう。

なじみがある国とはいえないフィンランドの子育てを知ることで、政策の子育てに与

える影響の大きさに気づき、自閉症や子ども虐待に関心を寄せることで支援への第一歩を踏み出した。

今回の取り組みを通して「家族」、「育児」のとらえ方を拡大し、仕事（保育士）として、あるいは自らの子どもへの育児という枠を超えた、子どもへのまなざしが強化されたといえる。

任意（保育士資格を取得しない）の受講者のうち男子学生は9名で、うち6名が春semesterに開講した「家族援助論」と同じ時間帯の秋semesterに開講している主として施設養護について学ぶ「養護原理」を受講している。彼らが将来、家庭や児童福祉施設のみならず、地域でも子どもに積極的に関わろうとする男性に対する「統計的差別」²⁾の軽減の一翼を担うことを期待したい。

一方で、日頃の社会への関心の低さや保育の本質の理解、保育の方法に関する科目の履修が進んでいないために、保育の対象の理解が身近なことに留まり、本の選択も予想をこえた多様性や独自性は見られなかった。今年度の見本を新刊書であることと、マスコミへの露出が多い著者のものならなじみやすいのでは、と選択したことも一因であろう。次年度は誰も選ばなかった子育て支援体制や関連機関・施設についての著書を見本にする予定である。

新松戸に在籍している学生の半数以上が大学図書館の本を利用していることを勘案すると、子育てや家族関係以外の本に魅力を感じるものがなかった、あるいは見つけれなかった、未整備であったことも伺える。

子育ては、子どもとの直接的な関わりにとどまらず、衣食住などの生活全般や暮らしている地域や時代性をも含む広いものであると考える。

今後は授業の中で、子育て支援の対象や支援体制の理解を深めるために地域性や時間軸を意識しながら、興味の幅を広げられるよう喚起しつつ、参考図書の紹介や大学の蔵書の充実も意識的に行っていきたい。

注

- 1 レポート課題は見本として別紙の通り筆者が作成したものと、未記入のものを配布した。
- 2 「統計的差別」とは個人が持っている資質や傾向を完全に見抜くことができない場合、その人の属性が持っている特徴から推測して判断することをいう。
多くの家庭で父親不在の育児が当たり前であるため、例外的に父親が育児に関わっていると医療関係者や保育関係者の対応に偏見が生じることがある。
治部れんげ 『稼ぐ妻・育てる夫 夫婦の戦略的役割交換』 2009年 勁草書房、250-258頁

文献

- ・グループこんぺいと（2003）『心の保育を考える CASE67』学研
- ・平井信義（2003）『「心の基地」はおかあさん』新紀元社

- ・香山リカ（2010）『母親はなぜ生きづらいか』講談社
- ・KKファンタジー編（2009）『てるてる天使の育児百科 ハッピー★ベビーケア』学研教育出版
- ・小林美智子（2007）『子ども虐待』明石書店
- ・小関康之（2004）『乳幼児の発達と子育て実践』中央法規
- ・松永暢史（2009）『男の子はもっと遊ばせろ！』幻冬舎
- ・茂木健一郎・須藤珠水（2010）『脳を活かす子育て術 0歳からの宝探し』PHP研究所
- ・仁平義明（2003）『ほんとうのお父さんになるための15章』プレーン出版
- ・なかむらみつる（2000）『やさしいあくま』幻冬舎
- ・中根晃（1996）『自閉症児の保育・子育て入門』金剛出版
- ・佐々木正美（1998）『子どもへのまなざし』福音館書店
- ・佐々木正美（2007）『かわいがり子育て—3歳までは思いっきり甘えなさい』大和書房
- ・佐々木正美（2008）『子育てでいちばん大切なこと』大和書房
- ・佐々木正美（2008）『「育てにくい子」と感じたときに読む本』主婦の友社
- ・佐藤英郎（2006）『キッズコーチング』アチーブメント出版
- ・高橋明宏（2000）『シンプルに育てる7つの方法』サンマーク社
- ・上田芳樹（2000）『親子になろう』晃洋書房
- ・谷田貝公昭（2005）『保育内容シリーズ② 人間関係』一藝社
- ・渡辺久子（2009）『子どもと家族にやさしい社会，フィンランド 未来へのいのちを育む』明石書店

家族援助論

～私が薦める育児の本～

学籍番号

名前

111 山崎 愛

著者 香山 リカ

本のタイトル「母親はなぜ生きづらいのか」

出版年 (2010 年) 出版社 (講談社
講談社現代新書)

内容

本書は、いったいつ頃から「子育ては母親の責任」というプレッシャーに母親たちが苦しめられているかを資料と臨床経験から読み解いたものである。

子どもは「家の跡取り」であると同時に「共同体の子ども」でもあると考えられ、父親が子育ての全責任を負っていた江戸時代。「良妻賢母」は国民国家に貢献すると文部大臣が説明していた明治時代。「自分らしい家庭教育を行う」という母親の自己実現の意識が強くなった大正時代。一方で大正中期から昭和初期にかけて「母子心中」が急激に増加した。これは現代の母親たちと同じ重圧を当時の母親たちが感じていたのではない。母親への重圧は1970年代の母性強調、三歳児神話の興隆期を経て、「いい男子」「イクメン」の登場する現在も続いている。

おすすめの理由・こんな人に読んでほしい！

香山は、日本の女性を悩ませているのは「母性があるから子育てが苦で」「ないはず」という後天的な割り切りゆえにあるという。そして私たちがまずすべきは「やらせない」「母親の想を捨てること」であり、男女双方が幻想と現実の母親を切り離して考えられるようにすれば「男性の育児参加」につながるのではないかとしている。

終章には「ニッポンの子育てセツのつひやき」、巻末には「簡単で母親の近現代史」もあるが、幻想と現実の母親、父親の存在、子どもや家族、地域との関わりを歴史的・科学的に考えられる。